総評　２０２４年９月分　杉本真維子

「教わったことも
も無く焚き　無
と　む。火　け
こ　こかを　れ
ういとるえ教ば」大嶋　碧月（兵庫県）
視覚詩を書いた、というよりも、大嶋さんの視覚への高い意識がこれを書かせたということかもしれません。その意識とはそのまま詩のフォルム（形式）のことでしょう。

「色のない風に／秋のにおいがすごい／／季節に死ねと言われるみたい」畔上透（東京都）
季節、つまり、時間というものの無情さがうまく表現されています。言葉を鷲づかみするような大胆な捉え方も魅力です。

『『あなたのように』じゃなくて／私は『あなた』になりたいのです」青葉夜（千葉県）
「あなたのように」という直喩には、あなたではない、という意味が隠れているからでしょうか。（その意味では、暗喩とはほんの少しだけ孤独を癒すものかもしれません）

「検索窓に告白した／欲望の数だけ／肌ざわりから遠ざかっていく」ルイ・アナン（千葉県）
検索窓とは「告白」なのですね。言葉を出す力だけでなく、食い止める力も必要なのだと思いました。

「口紅があくまでわたしを拒むから／鳩サブレーを三度襲った」汐見りら（東京都）
「鳩サブレーを三度襲った」。これはなかなか考えつかない言葉の接続ですね。鮮やかです。

「捨案山子家族ごっこをやり終えて」檜野　美果子（宮城県）
この哀しさ、みすぼらしさは、言うまでもなく「案山子」に留まりません。人間の深い哀しみが掬い取られています。

「夏の雨ほつそり伸びる祖父の脚」吉沢　美香（宮城県）
雨の長い残像でしょうか。その細さと白さは骨のようにも見え、単なる雨を超越して、「祖父」の意味を作ります。

「からんころん／ドロップ缶にこだまする／最後の一粒　いちご味」落合　志帆（栃木県）
「最後の一粒」が響くのは、それがいとおしまれているからでしょう。いちご味の人生というものがあるなら、それもまたいいかも、と思わせるだけの力があります。

「銀紙につつんだ鹿のなみだ声」桜庭　紀子（和歌山県）
一瞬を書き尽くそうとする意志のなかに、まだ誰も聞いたことのない声が響いています。

「夏の空置きっぱなしでプール閉め」花野　木春（東京都）

夏が、包囲され、つかまえられています。夏とはこのようにつかまえることができるものだったのです。

「定位置の枕の窪み／風のない平野の道に／柩が行き交う」氷丸（茨城県）

眠りと死のあいだには通路があるのでしょう。そのことが具体的に、正確に、書かれている、と思えるような何かがあります。

今回も新しいかたの力作が目立ちます。次回も楽しみにしています。